フランシス・F・コッポラの世界

—The Outsiders 論

川　出　才　紀

映画は，私たちに何かを訴えるが，それは映画の構成，カメラワーク，場面の構図，登場人物の表情やボディーランゲージ，セリフや場面場面に現われる象徴の積み重ねによって行われている。本稿では，主にセリフと場面に現われる象徴によって，映画“The Outsiders”を分析してみたい。

『あらすじ』

表層的には，Socsという裕福な山の手（“Southside”）の少年たちとgreasersと呼ばれる下町（“Northside”）の貧しい少年たちの対立物語である。GreasersのPonyboy，Sodapop，Darryの兄弟は，父母を交通事故でなくし，3人だけで暮らしている。長男のDarryは，建設現場で働き，弟たちの父親代わりを務める。二男のSodapopは学校を退学し，ガソリンスタンドで働いて，貧しい家計を助けている。

ある日Ponyboy，JohnnyとDallyは映画を見に行くが，そこで，SocsのCherry，Marciaと出会い意気投合する。そのことに腹を立てたCherryのボーイフレンドでSocsのBobらは，公園にいたPonyを袋叩きにするが，反対にBobはJohnnyに刺されて死んでしまう。PonyとJohnnyは，Dallyの助言に従い，山の上の古い教会に隠れる。Ponyは髪を切り脱色し，Johnnyはgreaseを洗い落とす。迎えに来たDallyとともに町に帰る途中で，教会が火につつまれ，遠足に来ていた子どもたちが助けを求めているのに出会う。救助に走るPonyとJohnny，後に続くDally。子どもたちは助け出されるが，Johnnyはひどい火傷で，下半身マヒの重傷を負ってしまう。そして“Stay gold（黄金のままでいてくれ）”ということばを残してJohnnyは死んでいく。Dallyは，その事実を受け入れることができずに，ドラッグストアを襲う。銃で撃たれ，傷を負ったDallyはDarryに助けを求め，公園に逃げ込むが，警官に撃たれ，Ponyの名を呼びながら息絶えてしまう。Ponyは，「風とともに去りぬ」の本の間にJohnnyからの手紙がはさんであるのに気付く。Ponyは，これらの出来事を思い起こしながら，宿題の作文を書き始める。一映画館の暗闇から，明るい太陽の下へ，一歩足を踏み出した時...。

『登場人物』

Greasers（街の北側に住む貧しい子どもだち）

Ponyboy Curtis：14才。本や映画が好きな少年。中心人物で，物語の語り手である。

Sodapop Curtis：16才。Ponyboyのすぐ上の兄。高校を中退し，ガソリンスタンドで働く。二枚目。楽天的で誰に対しても理解がある。

Darrel Curtis：20才。Darryと呼ばれるPonyboyの一番上の兄。一年前の両親の死後，弟

たちの面倒を見ている。Pony に対し，厳しい。屋根葺きの仕事で生計を支える。早く成長しすぎた。筋骨たくましく，タフで，クールで利口。

Dallas Winston：Dally と呼ばれる真の greaser。タフで鼻っぱしが強く，人生に対して冷ややか。逮捕歴がある。利口。

Johnny Cade：16才。両親の仲が悪い。小さくてきゃしゃな体つき。おびえた目をしている。

Steve Randle：17才。Sodapop と同じガソリンスタンドで働き，彼の一番の友。

Two-bit Matthews：18才だが，まだ高校3年生である。がっしりしている。軽口をたたくのが得意。彼にとっては，人生は冗談である。

Socs（街の南側に住む金持ちの子どもたち）

Cherry Valance：16才。赤い髪。チアリーダー。Dally を崇拝する。Bob のガールフレンド。

Marcia：16才。Cherry の一番の友だち。

Bob Sheldon：17才。ブロンドで，二枚目。いくつも指輪をはめている。時々酔っ払う。Cherry のボーイフレンド。利口。

Randy Anderson：17才。Marcia のボーイフレンド。Bob の最良の友。

『Ponyboy の成長物語としての視点』

この映画は Pony の成長物語として見ることが可能である。大人になることが社会的に要請されている西欧では，このような成長のモチーフ／テーマが，しばしば物語に取り上げられるものである。主人公の Ponyboy という名前は「小馬の少年」という意味である。その彼が様々な出来事を通して成長していくのである。

Pony の成長物語としての観点から，彼の成長を表わす言葉を取り上げてみる。物語が進むにつれて，Pony の成長ぶりがうかがえる。

ずぶ濡れになった Pony に，Dally が仲間の Buck のシャツに着替えることを勧めるシーン。シャツは Pony には，まだ少し大きい。

Dally : It's a little big on you but it's dry.

⇩

教会に逃げ込むシーンで，Johnny はパンやハムに混じって，ピーナッツバターを買い込むが，ピーナッツバターは子どもの食べ物の指標である。

Johnny : ...A loaf of bread and a week's supply of baloney here. Peanut butter.

⇩

病院で兄の Darry と再会するシーン。Darry の目には，Pony はどこか奇妙に映り，

Darry : You sure look funny.

⇩

やがて家に戻るシーンでは，「抱っこされるには，（Pony は）ちょっと大きすぎる」程成長している。

Sodapop : This kid is pretty big to be carried.

Pony が成長する転機は，教会で過ごした日々に訪れる。彼等が逃げ込んだ場所は，人里離れた山の上の，今は使われていない教会である。彼等は夜の中を汽車に乗って教会にたどり着き，日常から離れて，初めて自分を見つめる時間を得た。髪を切り，脱色した Pony が鏡を見ながら，“It really makes me look tough.”（反語的）と言った時，彼は，ユング流に言うならば，自分の中の弱い自分と対面したのだといえる。暗い無意識の闇をくぐり，そこで自分の中の影と対面し，やがてそれを統合し，成長してゆくという以下の構図をここに見てとることができる（ノイマン1984，河合1967)。greaser であることを示す唯一の髪型を変えた時，それまでの彼は死に，この象徴的な死を経て，やがて人間性に目覚め，新しい価値観をもって生まれ変わるのである。

- 夜汽車に乗り，今は使われていない教会という，人里離れた別世界に潜行した（＝無意識の世界）
- 硬い床に寝，baloney ばかり食べ，教会に閉じこもる（＝苦行）
- 髪を脱色した姿を鏡に写す（＝弱い自分との対面）
- 外には monster（怪物）がいる（＝竜退治)。兎を追いかける。（＝心の葛藤と復活）
- 寒く早い朝，金銀の朝焼けの中で詩を朗読する（＝新しい朝の始まり，魂の成長の予感）

『キリスト教の視点，仏教の色彩』

ここで，Pony の成長物語としての観点に，キリスト教および仏教の視点を取り入れ，様々な小道具が象徴するものについて見ていきながら，物語のテーマについて考えてみたい。

—楽園—

Johnny は Ponyboy とたき火にあたり，星空を眺めながら「greasers も Socs もいない，ただの人のいる所へいきたい」と願う。Pony は，それは“country（田舎，田園)”に在ると言う。彼等は今いる所を離れて，楽園に行きたいと願うのだ。

捨てられた教会は人々が信心を忘れたことをあらわす。Buck の店にみられるような堕落し腐敗した都会と山頂の荒れた教会，それをつなぐ荒涼とした田舎町，そこにさえ文明の波が届き，コンビニエンスストアらしきものがある。荒野に機関車や車というマシーンが入り込み，モノ—大量生産されるハンバーガーまで現われている。モノがあふれる世界で Pony はハンバーガーを食べ捨てることさえするのだ。かつては教会に人々が集い，美しい田園が広がっていたであろう場所には物乞いする子どもの姿がある。Pony もかつては，家族とともに田園にピクニックにでかけた楽しい思い出があるが，両親が事故でなくなって以来，そんな余裕もなくなってしまった。親代りの兄の Darry とはあまりうまくいっていない。楽園は失われてしまった。

何故，舞台がオクラホマなのか？オクラホマという中西部の田舎町—米国のどこにでも見られるようなごく平凡な町を選んだことによって，映画のモチーフに普遍的な意味を与えている。さらに，ニューヨークのような大都会は高度に文明化され，退廃を極めている。フロンティアは既にカリフォルニアまで達し，消滅してしまった。舞台は例えばニューヨーク，

カリフォルニアのどちらでも良かったと思われるのであるが，オクラホマに設定したことによって，「庭園」を思わせる牧歌的・中間的風景に「機械」というヘビが侵入する様子をはっきりと提示できた点も見逃せないだろう。映画の冒頭のシーンで，暗闇に汽笛の音が遠く響く。機関車の無気味な汽笛が遠く響きわたり，牧歌的風景への機械文明や産業主義の侵入を暗示する（マークス1972)。Pony の家族はピクニックに出かけ，その帰りに列車事故に会う。機関車という機械文明によって，暖かい家庭が破壊されてしまった。

さらに，南北戦争（後述）が鉄道建設に拍車をかけることになり，1869年に大陸横断鉄道が開通。つまり南北戦争が，鉄道・産業資本主義体制を躍進させ，拡大主義の一形態として都市が出現したという（浜野他1989)。Dally に言わせると，「殺人事件が起るのはニューヨーク（のような大都会）だけかと思っていた」が，オクラホマの片田舎でもそれは起った。そうした荒廃は大都市だけではなく，中西部の小さな町にも迫っているのである。都市は貧困と犯罪の温床である。牧歌的風景にも都市化の波が押し寄せ，その影響から，もはや逃れられなくなっている。飲酒が Twobit ら若者の間にまで蔓延り，Bob の人間を変え，人生を狂わせた。神は不在で，貧富の差は広がり，生存競争は激化するばかりである。夢の崩壊のもたらした憂鬱な気分は，富裕層にまで及んでいる。アメリカ社会の勝者であるはずの Socs までもが，当初の夢を見失い，精神的な空白状態に陥っている。富める者と貧しい者の不平等，Socs と Greasers のいがみ合いは増々エスカレートする。経済的に成功した Socs も，Cherry が映画館で Ponyboy に言ったように，幸福だとは言えない。物質的には豊かになっても，精神的には決して満たされているわけではないのである。町の中心に豪奢な教会の建物はそびえるが，山頂の荒れた教会は信仰心の喪失をあらわす。失われゆく田園風景の中で，家族や家庭や人間同士の絆が希薄になり，無垢の心は危機に瀕している。あらゆる者がアイデンティティを喪失している。Greasers を追いかける Socs たち然り，池にその姿を写した Pony と Johnny，帽子を拾った Twobit も然り。

—山の上の教会，石の床—

教会に着いて，疲れ切った Pony は硬い石の床に寝，夢を見る。これは旧訳聖書（創世記）で Jacob が石を枕に寝，御告げを得て祭壇を作ったという話を想起させる。教会の建つ Jay Mountain の Jay とは，Jacob を約めたものである。石はキリストと教会を象徴する（ド・フリース1984)。ここは山の上の教会で，いわば天国と地上をつなぐ場所である。そこで Pony は魂の再生を経験する。(原作では，Pony らが人目を避けるために，いつもいた教会の裏手は東を向いており，まるで世界の頂上に位置するかのように，切り立った崖の上から遠くまで見渡せる場所であった。Pony らがいたのは，天国に一番近い場所で，日の出—新しい朝を見ることのできる東側である。）教会は，楽園への回帰—無垢な心を取り戻すために Pony らが経なければならない試練の道程にある。それは怪物に守られており，堕落し汚れた都会ではなく，Dally に言わせれば「何の刺激・快楽もない country（田園)」にあるべきものである。Pony と Johnny はかつて country（田園）にいたことがあると Dally は指摘する。

Dally : What do they do for kicks around here anyway, play checkers or something?

This place is out of it. Uh, you two've been in the country before.

—髪，黄金の髪—

髪を切り，脱色したPonyがその姿を見て「タフに見える（反語的）」と言ったことばと「髪を切ると力がなくなる」というJohnnyのことばは，旧約聖書に登場する英雄サムソンを思い起こさせる。（サムソンは驚異的な力を持ち，ペリシテ人と戦うが，髪を切られ，力が抜けてしまい，捕えられてしまった。髪が伸びると，再び以前の力がよみがえり，ペリシテ人に復讐を遂げる。）その髪を切ることは男性的な力を奪うことである。髪を切ることによって現われた，自己の女性的な面，弱々しい自己とPonyは対面する。またサムソンの髪は放射する太陽光線をあらわすという（フリース1984）。Ponyの髪の黄金色もまた太陽を思わせる色であり，ここにPonyと太陽が重ね合わされる。Ponyの黄金色の髪には，日没と日の出のような「死と再生」の意味が込められており，彼がgold（後述）に到達する道を歩み始めたことを示す。

Pony : It really makes me look tough,

Johnny : You know the first thing the judge does is make you get a hair cut...I guess it's just a way of trying to break us. It's going to grow back, man. It's not that it won't.

Ponyは髪を切ることによってgreaserとしての印を失い，彼の求める強い（tuff）存在にはなり得なくなった。髪形を決めることによってgreaserらしくtuffであろうとしたことが不可能になったのだ。そして，たとえばサムソンのような強い「英雄」像からも遠く離れた存在になってしまった。英雄というステレオタイプはもはや存在しない。「英雄」や「greaser」といった紋切り型の存在を離れてはじめて真剣に「自分は何者か」という問に対する答えを見つけようと思い到ったのだ。

仏教では，釈迦の出家の際に髪を切ったという。また，金という色は仏教では解明と悟りを表わす（Hall 1994）。Ponyが髪を切り，金色に脱色したのは，悟りを開くことである。また唯一greaserらしさを表わす髪形を変え，見かけへの囚われを捨てることによって，それは達成された。さらにPonyがその頭髪を映した鏡は，魂を映すものであり，つまりはPonyの魂も黄金となることを意味する。鏡が曇っていない状態も，悟りを得た精神をあらわす。

—鏡，兎—

教会のシーン。鏡が心と意識を表わし，鏡を見ることは思索することである（シュヴァリエ1982）。また仏教では，鏡は清浄な魂，悟りを得た精神である（クーパー1978）。Ponyらが自我を探し求める旅に出て，ここで自分を見つめる時間を得た。PonyとJohnnyは変装し，その姿を池に写すが，そこには，現実の自己と現実の逆になった像が映し出される。本当の自分は一体どれなのか。Greaserらしい姿の自分なのか，金髪の弱々しい自分なのか。

池に写した姿は誰なのか。

Johnny : It's our looks or us.（見かけを取るか，自分を取るかだ）

本当の自分とは何か，自分はどう生きるべきか，この場面では彼等は迷い，戸惑っている。他人と違うとは，どういうことなのか，Soc と greaser はどこが違うのか，彼等は答えを探している。唯一誇りであった髪形，greaser であることを示す髪形を変えることによって，自己とは何か，自らの identity について彼等は考えはじめ，やがて彼等の中で二つの自己が統合されることを予感させる。教会のシーンは，Soc と greaser という枠の中の identity 探しから，さらに深く，自分探しを行う期間と解釈できる。

さて鏡に映った野ウサギは，復活祭のウサギである。復活祭は，春の生命の始まりをあらわす。Pony らにとっては，彼等の魂（＝鏡）の再生を予感させるシーンである。野ウサギを捕えようとして，まだ捕まえられないが，後日のある寒い朝に，朝焼けを見ながら Pony は啓示を受ける。その朝はいつもより冷たく（colder）早く（earlier），創世紀の朝もそうであったのか。新しい朝を迎え，Pony は生まれ変わろうとするのである。

―帽子―

これ以前に，映画館からの帰りに Twobit がどこかから風にのって転がって来た帽子をひょいとかぶるシーンがある。このシーンは原作にはない。これは，これまでの考え方，凝り固まったものの見方や態度を変えることをあらわすと考えられる。また，帽子をかぶって見かけを変えることは容易く，故にいがみ合いを続ける Socs と greasers の違いも，それくらいのものなのではないかという問いかけでもある。或いは，新しい identity を手に入れることをあらわすともとれる。新しい identity は，帽子をかぶるように容易くは手に入れることができないのだけれども。

Twobit : Got me a new hat.

―噴水―

この場所―教会に来ることになったのは，噴水での出来事が出発点となっている。噴水は，「エデンの園の真ん中の生命の樹の下にあったとされ，水は常に変化していくことから，永遠の若返りを象徴し，水を飲む者が若返り，青春を保つ（シュヴァリエ1982）」という。とすると，この噴水の水を飲んだ Pony の再生（若返り）を暗示するシーンとも言えるだろう。この水を飲まなかった Bob と Johnny はやがてなくなってしまう。また，噴水が「死と再生」を意味するならば，Bob の死にはふさわしい場所であった。噴水―Bob の死―を出発点として，Pony らは魂の再生への旅に出る。Bob は金髪を持ち（原作では Bob は黒髪，Dally が金に近い白髪である），その Bob がなくなった後，Pony の髪は金髪に脱色される。 Pony の髪の金色が太陽を表わす色であるが，太陽はまた「死と再生」のシンボルでもある。このように，ここには豊富な死と再生のモチーフを見ることができる。

『Gold』

さて，ここで映画のキーワードを手掛かりにテーマに迫ってみよう。まず Pony の髪の色である gold について考えなければならないだろう。

Johnny が最後に残した言葉が"Stay gold."であった。この意味は何であろうか。gold という言葉は，本文に 9 度出てくる。Pony が教会でそらんじた詩の中に 3 度，Johnny のセリフに 3 度，彼の手紙に 2 度，Pony のセリフに 1 度である。手掛かりは Robert Frost の詩と Johnny の手紙にある。まず，以下の Robert Frost の詩を見てみよう。

"Nature's first green is gold,	自然の新緑は黄金色
Her hardest hue to hold,	保つのが最も難しい色だ。
Her early leaf's a flower ;	自然の若葉は花
But only so an hour.	けれども，それはほんの一時にしかすぎない。
Then leaf subsides to leaf.	やがて葉は葉になってしまう。
So Eden sank to grief,	エデンは悲しみに沈み，
So dawn goes down to day.	夜明けはただの日になってしまう。
Nothing gold can stay."	何も黄金色のままではいられない。

レイコフ＆ターナー（1994）によると「一生は一日だ」「人間は植物だ」という基本的な隠喩が詩や小説などの様々な場面で見られるという：「人生の周期というものを理解し，それについて語るための一般的な方法の一つは人間を植物（ないしその一部）とみなし，人生を植物の生命の周期と結びつけるような形の隠喩を用いることである。...植物やその一部が一年という周期でおくる各段階は，人生のさまざまの段階に対応する一芽生えは青春に，たわわな葉は成熟に，そして枯れ葉は老年へと。(p.16)」これに従うと，上の Frost の詩の「最初の緑，若葉」は，「人生における若い時期」を指す。また「一生は一日だ」という基本的な隠喩から，この詩の「夜明け」が「若い頃」を，「日」が「壮年時代」をあらわすと考えられる。そして，「若い頃は gold（黄金）であり，gold であり続けることは難しい」という。「若い葉が花であるのは，ほんの一時間という短い時間で，やがて花である葉は，ただの葉になってしまい，夜明けもただの日になってしまう」という。これを図に表わしてみると：

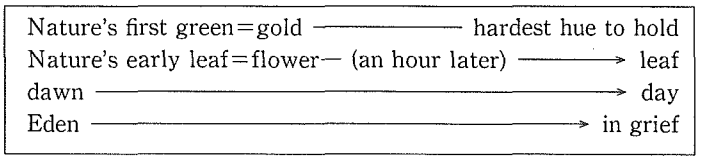

図 1　Nothing gold can stay

これによると，gold であるものは「自然の最初の緑/若葉，夜明け，エデン」ということになる。ちなみに green は，Thesaurus によると "young/new/blooming/immature" とある。green は「若い」「新しい」［花の咲いている］「未熟な」ということである。自然の最初の緑／若葉，夜明け」は「人生の若い時期」つまり「子ども時代」を指すので，gold とは子どものことであるといえる。「エデンは悲しみに沈んでしまった」のは，アダムとイ

ヴが知恵の実をかじったためにエデンを追われてしまったからであるが，彼等が知恵の実をかじることにより，羞恥心を覚え，それまで持っていた子どものような無邪気さを失ってしまったからである。だからEdenは子どものような無邪気な心を持っていること，これも「子ども」をあらわす。

以下のJohnnyの手紙によると，「黄金であること」とは「緑のような子ども時代」を指すという。子ども時代には，Ponyが夕焼けを見る時のように，まわりのもの何もかもが新鮮で，それは夜明けにたとえられる。

> ...I've been thinking about that poem, that guy that wrote it, he meant you're gold when you're a kid, like green, When you're a kid, everything's new, dawn, like the way you dig sunsets, Pony. That's gold. Keep it that way. It's a good way to be.

Goldとは，だから一言でいうならば「子ども」のことである。子どもにとっては，目に写るものすべてが新しい。Ponyが，繰り返し起こる夕焼けを，毎回初めて見るもののように感動し，そのものの本当の姿や美しさを見通す，そういうものの見方をすることである。そこには，おとながものを見る時のように先入観の入り込む隙はない。それは，アメリカ大陸を初めて見たピューリタンの水夫たちの驚き（wonder）の気持ちなのだ。以下の手紙の文は，そういった意味で，子ども達の命は，Johnnyの命よりも貴いと言うのである。（どんな命も平等ではあるけれども，）子ども達を救ったことは意義があったと書くことで，Johnnyが自分自身を納得させ，Johnnyが瀕死の重傷を負ったことを嘆き悲しむであろうPonyとDallyを慰める意味を込めると同時に，子どもの心を取り戻すべきことを訴えているのである。Johnnyの命と子ども達の命とは，抽象的な次元で，年かさの行った者と幼い者の心を指している。

> It's worth saving those little kids. Their lives are worth more than mine, they have more to live for. Tell Dally I think it's worth it.

『子ども』

登場人物の多くは若く幼い。ここで，映画の中に子どもを表わす表現がどの程度出てくるか，誰が子どもとして見られているのか見てみよう。

出現回数	発話者→指示対象　回数
kid　31	Dally → children 1　Twobit → Pony 2　Cherry → Socs 1 Twobit → Pony ないし Johnny 1　Darry → Pony 2 Dally → Bob 2　Tracy → children 2 Johnny → children 2　Dally → Pony 3　Jerry → P, J & D 1 Sodapop → Pony 1　Steve → children 1　Randy → children 1 Randy → Pony 1　Twobit → Johnny 1　Pony → Johnny 1 Pony → children 1　Darry → Sodapop 2　Tim → Johnny 1 Tim → Pony 2　Twobit → Dally 1　Johnny → general 2
boy　8 (3)	Cherry → Pony 1　Johnny → Bob 1　Dally → policemen 1 Buck → Pony と Johnny 1　Twobit → Socs 1 Cherry → Bob 1　Dally → greasers 1 TV → Twobit ? 1　(感嘆詞　Twobit 2,　Cherry 1)
(boy's home)　5	(Pony → Pony 2)　(Darry → Pony & Soda 2) (Pony → Pony & Soda 1)
young　5	Pony → themselves 1　Twobit → Cherry & Marcia 2 Twobit → Marcia 1　Jerry → Pony 1
early　2	Dally → Pony, Johnny & Dally 1 Robert Frost → Nature's early leaf 1
baby　3	Twobit → Marcia 1　Twobit → girl 1　Bob → Cherry 1
babysit　1	Twobit → Pony 1
little　5 (2)	Pony → children 1　Dally → Johnny 1　Dally → Cherry 1 Darry → Soda 2　(Dally → Stingray 1)　(Pony → Soc 1)
children　4	Tracy → children 3　Jerry → children 1
son　2	Jerry → Pony 1　Store clerk → Dally 1
juvenile　1	(Pony → juvenile court 1)
girl　3	Dally → Cherry 1　Twobit → Marcia & Cherry 1 Twobit → Marcia 1

図 2　子どもを表わす表現の出現回数

kid, boy と呼ばれているのは，あわせて Pony が15回，その他は以下の通りである。kid, boy という呼称を使うことで，呼ばれた者が幼いことを示唆し，また観客の頭に彼等が幼いという印象を植え付ける効果を持つ。

Pony　15	children　8	Johnny　6	Bob　4	Sodapop　2
Dally　2	Socs　2	general　2	greaser　1	others　2

図 3　kid, boy の指示対象

こうしてみると，Pony が kid, boy と呼ばれる回数が最も多く，登場するシーンも多いのだが，映画の中で，彼が最も強く子どもとして印象付けられることがわかる。(なお baby は，3 度とも女性に対する呼びかけとして使われているので，ここでは除外している。)

Pony には，子どもから大人へと成長していく者として，そして gold（＝子どものようなものの見方ができる者）としての二重の意味が付与されている。

さらに冒頭の，Pony，Johnny，Dally が映画を見にいくシーンの“We're early,”の意味は，文字どおりには「(映画を見に行くのは）まだ早い」であるが，「一生は一日である」という隠喩によると，また映画のテーマから考えると「俺たちは若い」という意味になる。

こうした「子ども」に対応する存在として「大人」がある。この場合の「大人」というのは，Pony がやがて成長してゆく存在としてのおとなとは異なる。夕焼けをみることをしない，子どもの目を忘れてしまった，紋切り型の見方しかしない者たち，子どもを火事から救ったのが greaser だと知って驚いた Jerry。彼はまた長く続いた習慣を破ることができない。そういう Jerry に代表される存在がここでいう「大人」である。Tim や Twobit，Steve もやがてそのような大人になってしまうことを予感させ，Pony は，それをなんとかしたいと考える。Darry にも夕焼けを見る機会を与えてやることはできないのだろうか。

大人社会は腐敗しており，登場人物の子どもたちの親の多くが，その責任を果たしていないか，または不在である。Ponyboy，Sodapop，Darry の両親は事故によってなくなっており，幸福な家庭は失われている。Tim と Curly Shepherd 兄弟の親も，その存在が感じられない。そして Tim は Pony たちが Socs の一人を殺したことを褒めさえしている。そのような価値観を彼ら子どもに植え付けたのは一体誰か。Johnny の両親は毎日のように仲違いを繰り返している。父親は子に暴力を振るうか，無視するかであり，利己的な母親は子が瀕死の重傷を負っても，心配するどころか，そのことによって彼女が如何に迷惑を被ったか愚痴をこぼすのが落ちだと言う。子への愛情の欠落があるだけである。彼らは Johnny が行方不明になっても行き先を尋ねもしない。（これに加えて，原作では父は酒飲みである。）「親父が俺を殴ってる時の方がまだましだ。少なくとも俺がそこにいるってことが分かってるってことだからな。」親が子にいわせるセリフの，なんと悲しいことだろうか。Johnny は親を求め求めて得られず，絶えず怯えた目つきをしている。Twobit の場合は，彼が部屋を片付け出せば驚く母である。甘やかされているのか，放っておかれているのか，母親が命がけで子に関わっているとは思えない（或いは関わる余裕がない）。まともな食事を与えているとも思えない。Twobit は，ケーキやビールを朝食に食べる。（原作では父親は家を出ていってしまい，母親はホステスをして Twobit とその妹を養っていることになっている。）彼は，間違ったもので飢えを満たそうとしているのである。Dally の父親に至っては，子どもが自動車事故で死のうが，酔っ払っていようが，牢屋にはいっていようが，お構いなしだという。また，原作では Steve は父親を憎んでいる。彼等は親の愛情から切り離されており，どの親も親のにおい一存在を感じさせない。

Pony らの両親が生きていた頃は，幸せな家庭があった。けれどもそれは，彼らの乗った自動車の脇腹に機関車が突っ込んでくるまでのことであった。温かい家庭は，突き進んでくる機械文明によって破壊されてしまった。その他の大人も腐敗している。小学生達の教師である Jerry は，自分の手で子どもを助けることはしない。子どもにはタバコを禁止するが，自分は吸い続ける。社会の伝統や慣習を踏襲し続ける存在として描かれる。また小学生等を助けたのが，greasers だとは信じない。ステレオタイプの概念しか持たない存在である。社会の慣習の上にどっかりとあぐらをかいて太り続けているのだ。ドラッグストアの主人は，

Dally に対して実弾をこめた銃を向け，容赦なく撃つ。Dally の気持を理解せず，大人の社会の道徳律で子どもたちを縛ろうとする。子どもたちは大人に倣って銃を持つのではないか。子どもたちは大人を真似てたばこを吸うのではないか。警官は，実弾で Dally—自らの子どもたちを撃ち殺してしまった。Dally が彼等に向けたのは空の銃だったにもかかわらず。本当は，大人たちは，Dally が追い詰められる前になんとかしてやらなければならなかったのだ。Dally は，Johnny が死んでしまった時，病院で働く人々に向かって「なんで人助けなんかしようとするんだ！そんなことしたって，なんの役にも立たないのに！」と叫ぶ。彼はその時，エスタブリッシュメント—大人社会の偽善に対して，人生の不条理に対して，やり場のない怒りをぶつけたのである。（原作では，このセリフは Johnny の病室で彼の亡きがらに向かって言われる。）

このように，彼らには，まともに向きあう者がいないのである。彼らを受けとめてやる者がいない。彼ら，つまり大人の心の中の子どもが，傷つき死んでゆく時に，その叫びに耳を傾ける者が誰もいないということなのである。

コッポラは可能な限りスクリーンに親や大人の姿を登場させない。Pony の両親の顔は Pony の思い出として現れるだけである。Johnny の両親の姿もシルエットで写されるだけである。Johnny の母親が病院に見舞いに来て Pony らを罵倒するシーンもカットされている。そうすることにより，両親のいる温かい家庭の不在を印象づけるとともに，子どもの（心の）危機的状況を浮かび上がらせることに成功している。更に，大人の登場人物をできるだけ抑えている。Jerry ともう一人の女性教師，病院の職員，看護婦，警官そしてドラッグストアの店員など，数少ない大人の登場人物はすべて端役で，（作者のスーザン・ヒントン演ずる看護婦は別としても）これらは大人社会の虚偽と偽善をあらわす存在として配されている。原作は，Jerry に火事の現場で Pony らに「私が助けに行く。君らはここに残っていなさい」と言わせている。また子どもを助けてもらった親たちが Johnny のお見舞いに来ている。判事と医者が登場して，Pony らに情けある審判を下す部分は，映画ではカットされている。病院の医者が Dallas に遭遇したのは，映画では Johnny の死の直後で，Dallas の振り回す拳銃を見てそそくさと行ってしまうのだが，原作では Johnny の病室に入る直前で，Dallas にナイフで脅されても，「病室に入れてやるのは君たちが彼の友達だからであって，そのナイフのせいではない」と毅然として言ってのけるのである。こうした原作での大人たちの善良な部分を削ぎ落とすことによって，映画は，「大人社会」対「子ども」の対比をより明確な形で提示しているのである。そして，今，最も必要とされていることは，「子ども」の状態に立ち返ることだというテーマを強く印象づける。

さて，この他に gold に関連する語を調べてみると，以下のようになる。

bright	3 度（冒頭と終わりの Pony の作文，Pony）
blond	1 度（Twobit が Pony を形容）
Blondie	2 度（Dally が Pony を形容）
sun	2 度（風とともに去りぬ）
sunset	4 度（Pony 教会の寒い朝，Cherry との会話，Johnny の手紙）

この中でsunsetが，以下の教会のシーンや丘の上のシーンのように，「夕焼け」とは別の意味を担っている。つまり「夕焼け（sunset）を見ることができる」かどうかが，「子どもの目を持つことができる」かどうかを示す指標として使われている。教会の，ある寒い朝Ponyがこの詩を読んだ時，彼ら二人に最初の啓示が訪れた。そして，丘の上のCherryとの会話で，Ponyは「夕焼けをみることができる」という表現を上の意味で用いている。Cherryの髪は金髪ではないが，夕焼けを思わせる赤毛である。彼女の生き方はgoldを目指すものである。生まれたときの心のままではいられなくとも，彼女のように知性をもちgoldを目指すというスタンスは取れる。また，そこにPonyらが，これから取るべき生き方のヒントがあると思われるのである。

教会のシーン

Johnny: ...You know, I never noticed colors and clouds and stuff till you kept reminding me about them. It's kinda like they were never there before.

Pony: Yeah. I don't think I could ever tell Steve or Twobit or even Darry about the clouds and sunset. Just you and Sodapop. Maybe Cherry Valance.

Johnny: Guess we're different, huh?

Pony: Shoot, yeah. Maybe they are.

Johnny: Maybe you're right.

丘の上のシーン

Pony: Can you see the sunset from the southside very good?

Cherry: Yeah, real good.

Pony: You can see it from the north side, too.

Cherry: Thanks, Ponyboy, You dig O.K.

Pony: See you around.

このことについて，もう少し詳しく考えてみよう。ここでは，まず「同じ夕日を見られるSocsとgreasersの世界は，そんなに違わないのかもしれない」ということを意味する。或いは「southside，northsideという違う立場の者でも同じ夕焼けを見て歩み寄ることができる」―つまり，「同じ夕日の美しさに感動し，気持ちを通い合わせることができる」という意味だと解釈できる。このやりとりの前に，PonyがCherryに「Johnnyを見舞ってくれないか」と頼んでいる。がCherryはJohnnyが，彼女のボーイフレンドのBobを殺した人だから，という理由で，それを断わっている。そしてBobの良い面をPonyに話し始める。怒ったPonyはCherryの「お情けはいらない」とつき返すが，Cherryは「お情けではない」と応える。Ponyは「Cherryのお情け（charity）はいらない」と言った時，あちら側（southside）の豊かな者―SocsのCherryと，こちら側（northside）の貧しい者―greasersのPonyやJohnnyの違いを強く感じたはずである。ところがCherryに「（豊かな者から貧しい者への）お情けではなく，（Ponyと話をして，気持が通じる人だとわかったから）手を貸したかっただけなのだ」と言われ，Ponyは，Socs，greasersという壁を自分

の中からとっぱらったのだ。だから「southside, northside という立場の違う者でも同じ夕焼けを見ることができる」と言えたのである。そして，そのことを理解し，Cherry は「わかってくれたのね。」と答える。

もう一つの解釈は，「夕日を別の面から見ることも可能である」「なにごとも一面からのみではなく，別の面から捉えることもできる」ということである。先ほどの Pony と Cherry のやりとりの中では，（飲んだくれで，暴力を振るう）Bob も，別の面から見ると，本当に優しく，リーダーとしての資質を持っていたことがわかる。だから，対象に対して，一般に信じられているいわゆるステレオタイプとしての見方しかしないことによって，対象の全体像や，本来の姿を捉える機会を失ってしまう。心を開き，立場を越えて，相手の姿を理解しようとする気持ちを持つことの大切さに Pony は気付かされ，「Cherry のところからも夕日が見えるか」と尋ねたのである。それは，子どもが初めてものを見る時の見方に繋がるものである。先入観にとらわれない子どもの目を持つことが今必要とされているのであり，そのことが黄金なのだ。

これを図にしてみよう。

夕焼け	
northside	southside
北（下町）側から	南（山の手）側から
Bob	
Johnny をやっつける	He could be real sweet.
大酒を飲んで酔いつぶれる	He had something that made him
Pony を溺れさそうとする	different, made people follow him,
	maybe a little better than the crowd.
Pony の側から	Cherry の側から

図 2　side（側）の 2 重の意味

Darry は Pony に厳しくあたったが，それは Pony が思い込んでいたように Darry が彼のことを嫌っていたからではなく，父母を失ったように，再び愛する者を失いたくないという Darry の心から出た行為だったことに，Pony は気付くのである。Pony は，この時 Darry の態度を別の側から見ることができるようになった。

『different ということ』

“Socials”「社交クラブ」を約めた Socs という名前は，競争社会（“rat race”）の中での主流（“main stream”）の人々を表わす。原作によると彼らはアメリカの競争社会の直中に投げ出され，自らの感情を抑圧し突き進む生活を送っている。金銭的にも物質的にも満たされており，資本主義・商業主義社会の成功者たちである。かたや greasers は，貧しい，いわば社会の落ちこぼれである。だが，感情をむき出しにできる分，自然児に近い存在かもしれない。けれども，その違いは本質的なものではない。Pony や Bob は最初 greaser や Soc のことを次のような人たちと規定した。彼等によると，greaser とは「長髪に grease を塗る人たち」で，対する Soc は「マドラスチェックのシャツにムスタングを乗り回す人たち」である。ムスタングもマドラスチェックのシャツも Socs の印であるが，これらは物

質主義・資本主義によって生まれた富裕な人々を象徴するモノに過ぎない。単にうわべを飾るものであり，人の本質を規定するものではない。ここには，見かけによる型にとらわれた分類があるだけで，その奥にある個人の本当の姿は見えてこない。

greaser たちにとっては，tough であること，さらにその上をいく tuff であることは，とても大事な価値基準である。けんかが強いこと，かっこいい車を乗り回すこと—そうしたことが，彼等にとって tuff なのである。また，その延長線上に hero（英雄）という概念——紋切り型の——がある。これらは，Soc，greaser というステレオタイプにも通じるものだ。人は，あらゆるものを分類し，ラベル付けを行う。分類は，特に見かけや，属するグループによって行われるが，果たして，それが常に正しい分け方なのか。自己とは，本来は「個としての内実」から成るはずだが，他人が自分を見るのは，まず「見かけ（façade)」である。人は経験を重ねていくうちに見かけで効率的に判断することを覚えるが，この物語の中で成長するとは，相手を十羽ひとからげでくくるのではなく，個として見ることができるようになることを意味し，そうやって初めて a whole person となり得る。

Johnny : Guess we're different, huh?
Ponyboy : ...Maybe they are.

このやりとりでは，雲や落日のことは，Steve や Twobit，Darry には話せないと Pony は考える。話せるのは Johnny，Sodapop と Cherry だけだろう。“different（異なる)”というのは，どういうことか。何を基準に「違っている」ことを判断するのか。一番簡単な方法は「Soc 対 greaser」のように，或いは「ヒーロー対不良少年」のように，見かけや肩書き，所属するグループによって，決めることである。だが Pony はそうではない「夕焼けを理解できるもの」と「そうでないもの」によって分けた。

	Ponyboy (greaser)
Steve (greaser)	Johnny (greaser)
Twobit (greaser)	Sodapop (greaser)
Darry (greaser)	Cherry (Soc)

図 3　Pony による分類

Pony : I don't think I could ever tell Steve or Twobit or even Darry about the clouds and sunset. Just you and Sodapop. Maybe Cherry Valance.
Johnny : Guess we're different, huh?
Pony : ...Maybe they are.

自分達が違っているのか，彼等が違っているのか。あらゆる者は，それぞれに個性を持つ。人間はひとりひとり違っているのだが，見かけに目を奪われて，「大人たち」は，個を見ようとしない。彼等は，まわりのものをタイプに分け価値判断を行っている。そうすることは人間の知恵であり，彼等が生きていく中で身につけた術であるが，ともすれば見かけの下に隠された個を見失うことになる。子どもにとっては，まわりのものすべてが初めて見るもの

であり，あらゆることが感動の経験である。子どもは物事をありのままに直視し，本質を見抜く。裸の王様の裸の姿を，先入観なく，まっすぐ見通したのも子どもの心なのである。

「慣れる」ということは，大人の知恵だけれども，あたり前のように続いてきた解釈も，時には初心に立ち返って見直す心構えが必要なのだ。たばこを吸うという，長く続いた行為も，時に立ち止まって問い直すことが必要なのである。治療のために運ばれた病院の待合室で，Jerry は未成年者の Pony に何故たばこを吸うのかを尋ねる。Pony はそれには答えず，Jerry 自身も吸っていることを指摘し，何故かと問い返す。Jerry の答えは，「年上で長く吸っているから」である。ところが，当り前のように長く続いていることが，必ずしも正しいことなのかどうか。苦笑を誘う場面であるが，あらゆることを，初心に立ち返って見る姿勢—子どもの目を持つことが必要とされている—それが Pony 等の取るべき生き方なのだと言える。毎日起こる夕焼けも，初めて見るように眺めることが必要なのだ。そうやって眺めてはじめて，夕焼けの本質にふれ，その美しさに感動できる。見かけの下の隠された個の本質，本当の姿を発見できるのは，そういう姿勢だけだ。そのことに気付いたのは，物語の中では，Pony，Johnny，Cherry や多分 Randy だが，もちろん Dally にも，それに気付く可能性はあった。彼にそういう機会さえ与えてやれたならば。Johnny が生まれて初めて町の外に出る機会を得，Pony に色や雲のことを教えてもらったように，そうした機会さえ与えてやれたならば，Dally にも可能性はあったのだ。

社会はステレオタイプの概念に従い，greaser が人を助けることなどできないと思い込んでいる。必要とされているのは，伝統や慣習を越えて，個人の資質を見ることであるのに。見かけや先入観に惑わされずに，人間の内なる価値をありのまま受け入れ，自己の価値体系を作り上げることである。大人社会の二重性，矛盾に感化されず，本質的内在的な正義の声に耳を傾けることが必要なのである。

Rumble の後のシーン—Soda や Steve たちが床に座り込んで，彼らが受けた傷についてやりとりするシーンは，原作にはない。このシーンを挿入することによって，コッポラは闘うことの空しさを強調している。Socs との rumble に勝って，Greaser たちは何が得られたのだろう。“What do you mean by different?” このセリフを文脈から取り出すと，「違っているとはどういうことか」である。我々に再び問が投げかけられている。

Steve? : What do you think, Soda? Ain't it make you look tough?
Soda : The thing makes you look different,
...
Steve? : What do you mean by different?

『Hero』

“hero” という表現が 8 回出現している。
これと関連して，具体的な英雄像の一つとして “Superman”，“Super-” は，2 回出現している。また映像的に 1 回—Dally が襲ったドラッグストアの店員として登場する。彼が映画「スーパーマン」のヒーロー（クラーク・ケント）そっくりなのは偶然だろうか。Dally が

発話者→対象者　回数	
Jerry → Pony, Johnny, Dally 1	Steve → Pony 2
Twobit → Pony, Johnny, Dally (newspaper) 1	
Steve → general 1	Pony → general 1
Twobit → Johnny 1	Dally → Johnny 1

表 3　"hero" 出現回数

襲ったドラッグストアの，このシーンは原作にはなく，Dally のセリフからわかることになっている。店員の姿格好と，彼が空の拳銃を突き付けた Dally に対して，本物の拳銃で対抗したことは，後から付け加えられている。

発話者→対象者　回数	
Steve → Darry 1	Twobit → Randy (Mr. Super-Soc) 1

表 4　"Super-" 出現回数

Steve は，「英雄」という存在があると思っている。新聞も Johnny が「不良少年」から「英雄」になったと書き立てる。だが，はたして「英雄」などというものが存在するのだろうか。Johnny は，ある日突然「英雄」に変ったのだろうか。世間は greaser が英雄的行為をしたことに驚く。あたかも "greaser" という存在が，善行や英雄的行為を行い得ない者であるかのように考えていた。先入観が，彼等の本当の姿を見極めることを妨げている。「不良少年が英雄になる」という新聞の記事を見て，Twobit は，"What I like is the turn hero bit there (英雄に「なる」ってところがいいな)。" と皮肉をこめて言う。greasers を個人として見ていれば，不良少年が英雄に「なる―変った」などとは考えないはずだ。Twobit にしてみれば，Pony 等が英雄的行為をするのは不思議でもなんでもない。世間は，"greasers" がそんなことをするわけがないと考えているのだが。肩書きや見かけで人を分けるやり方と，人を個人として見るやり方がある。はじめから，世間で言ういわゆる英雄などという存在はないのである。先入観なくして，個人を見極める態度が必要とされている。それは，子どもが曇りのない目で，まわりの世界を初めて見る態度に通じるものなのだ。Rumble の前に，Socs の Randy と greasers の Ponyboy は話をする。Randy は，二つのグループがいがみ合うことに疑問を抱き，Pony にその心を打ち明ける。別れ際，Randy はうっかり Pony のことを "grease" と呼ぶが，急いで "kid" と言い直す。Randy も気がついたのである。"kid" は，グループの肩書きを表わさない中立的な表現であり，また「子ども」をも意味する。このシーンは二人が，子どものような目を取り戻し，初めてお互いを個として認め，名乗り合ったシーンである。人間として連帯を果たし得た瞬間。Twobit が Randy のことを Mr. Super-Soc と呼んでも，Pony はその肩書きを否定し，彼のことを "Just a guy" だと言ったのである。この時 Randy と Pony は gold に一歩近づいた。

Randy : Anyway, thanks, grease. Hey, I didn't mean that. I meant thanks, kid.
Ponyboy : Been nice talking to you, Randy. My name's Ponyboy.
Twobit : So what'd Mr. Super-Soc have to say?

Ponyboy : He ain't a Soc. Just a guy that wanted to talk.

肩書き	中立	個人として
grease	kid	Ponyboy
Mr. Super-Soc	guy	Randy

図4　Randy と Pony の呼びかけ

ところが，そういった物事の本質を見抜く子どもの目が危機にさらされている。これは，以下のような事柄に象徴される。

(1)　空き地で，子どもたちが賭け事をする。
(2)　けんかに明け暮れる（広場で。映画館の売店で。夕日の丘で。rumble で。）
(3)　Johnny の両親の不和，Pony の両親の不在—子どもを守ってやるものがいない。
(4)　お金がなく，物請いをする。
(5)　ビールやケーキという朝食には不適切なもので空腹（な心）を満たす。
(6)　火事の炎と煙に巻かれてしまう。
(7)　Darry は両親を失い，早く大人にならざるを得なかった。
(8)　Johnny は，大火傷を負い，たった17年の生涯を閉じてしまう。
(9)　Dally は，警官の銃弾に倒れ，死んでしまう。

登場人物の心象を表わす以下のようなセリフが上記の事柄を強調する。

(3)に関しては，Pony が上着を忘れて言った "Freezing." のセリフが，Pony と Johnny を温かく保護してくれる者のいない寂しさ，寒さを表わす。(5)については，Twobit の朝食に，テレビのアニメの "Hey boy, you're hungry." のセリフが重なり，Twobit が食べるには食べるが，ビールとケーキという間違ったもので空腹（な心）を満たそうとしている。(6)で，火事に巻かれた子どもたちの救助を求める女性教師の "The kids! Help the kids! The children!" という叫びが，子ども（の魂）が危険にさらされていることを訴えている。

さて，Dallas Winston の名は，西部の男を思い起こさせる。Dallas はテキサスの首都の名で，Winston はタバコの銘柄である。彼は，いわば荒野に住む自然児である。"The Outsiders" の原作でも，Dally はロデオをやっている。映画では西部色は抑えられており，Dallas という名とテキサスへの憧れ，（原作にはない）映画館の売店での，Pony の「俺たちがメキシコまで逃げてしまったと Twobit が思うかもしれない」というセリフ，その他 Buck の店や客の格好から窺えるくらいであるが，悪いことなら何でもやる Dally は，彼の住む社会には納まりきらない荒くれ者，これも自然児なのではないか。フロンティアがなくなり，荒野が消えて，Dally のような自然児が住む場所はなくなってしまった。かつてのアメリカの移民たちは，西部に地上の楽園を建設すべく，荒野を開拓していった。そこに，人々はダニエル・ブーンやバッファロー・ビルのような英雄—「アメリカのアダム」を求めた（亀井1993)。荒野がなくなってしまった今，そうした英雄たちも，もはや活躍の場を失

ってしまった。窮屈な社会の規範はDallyには合わないのだ。そして最後にDallyは，テキサスのアウトロー，ビリー・ザ・キッドのように，保安官ならぬ警察に拳銃で打ち殺されてしまうのだ。“He's just a kid!”という叫び声を聞きながら，テキサスのカウボーイは死んでしまった。新世界の荒野にエデンはなく，西部のヒーローも，もはやこの世には存在し得ない。

Dallyは，南北戦争前後に活躍したヒーローたち—例えばビリー・ザ・キッドという人物像と，時に二重写しになる。Billy（名前までDallyに似ているではないか）は南部と北部の牧場主の争いに巻き込まれ，南部の側につく。ビリーは家畜泥棒や保安官殺害などの悪業を働いたために牢屋にいれられ，脱走するも最後には保安官に撃ち殺される。南北の牧場主は，前者がオールド・タイプ（アダム的，純朴な自然派），後者が首都に根を張る政治・経済・司法の実力者たち（醜い権威による文明派）をバックにしていた。さらに，この牧場主たちのグループには人種的・階級的な違いがみられた—南部は多くのメキシコ人も抱える被支配者階級，北部は資本家らの支配者階級である（亀井1993）。Dallyらのgreasersにも，Johnnyや冒頭のナイフの乱闘シーンにメキシコ（ヒスパニック？）系らしい者が加わっている。Dallyは作品では北部に住むが，明らかに被支配者階級に属し，社会の規範からははみ出す自然児（南部側）である。牢屋に入れられたこともあり，最後には警察に殺されるところまで，そっくりである。違うのは，Dallyにはもはや荒野は残されておらず，都会（北部）に取り残されてしまったということである。そして，Dallyもまた，多くの西部のヒーローのように，女性と結ばれることはない（亀井1993）。CherryはDallyに惹かれているが，DallyはCherryを愛し返すことはない（原作）という。二人の関係は決して実ることはない。現代のヒーローは，“Texas, man. Texas.”などのセリフから窺えるように，西部の楽園に憧れながら，楽園とは似ても似つかぬ人工の公園（park）で果てるのだ。

その他のヒーローたちはどうであろうか。資本主義社会・物質文明は商品の大量生産を前提とし，大量消費社会を生み出した。この大量消費社会の波はニューヨークのような近代都市ばかりでなく，中西部の静かな田舎町にも押し寄せ，至る所にテレビやハンバーガーショップが見られることとなった。モノの氾濫は精神の荒廃を生む。Greasersは貧困に押しつぶされ，Socsは人間性を失っていった。Socsは高価なムスタングを乗り回し，Greasersはそれに憧れを抱く。けれども，モノを手に入れた者も，そうでない者も満たされてはいない。SocsのBobもGreasersのTwobitも酒に酔い，冷静を失う。　ヒーローは不在で—それさえも大量生産・消費の対象となってしまっている。Twobitの愛するヒーロー，ミッキー・マウスは，機械文明の申し子だ。彼が活躍するのはテレビの中だけである。彼の姿はTシャツに印刷され，商業主義の波に乗って，巷にあふれかえる。ヒーローに憧れる者は，それを身につけ，せめてヒーローになった気分に浸るしかないのだ。作品中のもう一人のヒーロー，スーパーマン—クラーク・ケントは，今ではしがないドラッグストアの店員におさまっている。ネクタイを締め，明らかに社会の規範の中で暮らしているのである。そして，都会に取り残された荒野のヒーローDallyに銃を向け，自らの手で傷を負わすのだ。

『登場人物について』

ここで登場人物の名前について見ておきたい。

名前	意味，表すもの	備考
Ponyboy	小馬の少年	
Sodapop	清涼飲料水	
Cherry	さくらんぼ	
Valance	掛け布，おおい	(Balance?)
Darry		
Darrel (OE=dear)		
Curtis (=courteous)	礼儀正しい	
Dally	ふざける，たわむれる，からかい半分に手を出す	
Dallas	テキサスの首都名	
Winston	タバコの銘柄	

図5　登場人物の名前と意味

Ponyboy という名は，子どもをあらわす。Sodapop（清涼飲料水）は思春期の，ソーダ水の泡のようなはかなさを表わす。Sherry はその髪の色（赤毛）のために Cherry と呼ばれるが，赤毛の女性には勝ち気な人が多いというのが，西洋のステレオタイプである。Cherry 自身も自分をしっかり持った女性である。また名字の Valance [vǽləns] は，Balance [bǽləns] という語を想起させる。Cherry は良識と，Socs/greasers という範疇を超えて物事を判断できる平衡感覚を持った女性である。Johnny の名字 Cade には，「〈家畜の子が〉母親に捨てられて手飼いにされた」という意味がある。Johnny の寂しさ，境遇そのものを表わす名だ。Pony が映画館の帰りに，思わず「黙れ！お前だって家では邪魔ものなんだ，ジョニー・ケイド！」と叫んだ時，この名の持つ意味が一層，Johnny の孤独感を際立たせる。Tim Shepherd の Shepherd とは，もちろん「羊飼い」であり，時に「指導者，牧師，神」を表わすが，彼が Johnny Cade や Pony という子馬を導く者だとしたら，誠に皮肉な名前である。Twobit は，原書によると，彼の「つまらない」お喋りを止めさせられないので，この名になったという。しかし，時に深遠なこと，真理を述べるのが Twobit であり，社会の秩序の外にいる道化的存在とも言えるのではないか。Dally の本名 Dallas Winston は，前述の通り，macho なカウボーイをイメージさせる名前である。Dallas は Texas の首都の名であり，Winston はタバコの銘柄である。Darry の名字の Curtis は「礼儀正しい」という意味で，Dally の「ふざける，たわむれる，からかい半分に手を出す」という意味と好対照をなす。Dally が西部の荒くれ男ならば，Darry は礼儀正しい紳士というところか。Darry と Dally はともに Darrel と Dallas という本名があるが，愛称で呼ばれることの方が多い（表5）。二人の愛称は，音の上では [r] と [l] の minimal pair の違いだけである。Darry と Dally は一人の人間の表裏一光と影と考えられるのである（後述する）。

『Dally』

ここで，登場人物のひとり Dally についてもう少し詳しく見ていこう。Dally は，次のように「子どもが嫌いだ」と言っている。

Dally : Hey, don't get wise. I don't like little kids. I don't like 'em. I just...Get out of

呼び名	回数	話者	呼びかけ(回)	言及(回)
Dal	21	Johnny	8	4
		Ponyboy	4	3
		Twobit	1	0
		Darry	1	0
Dally	14	Johnny	1	6
		Ponyboy	1	1
		Twobit	0	2
		Sodapop	1	0
		Steve	1	0
		Darry	0	1
Dallas	10	Johnny	3	0
		Ponyboy	1	1
		Cherry	0	3
		Twobit	0	1
		Sodapop	0	1
Darry	21	Ponyboy	2	7
		Sodapop	4	1
		Twobit	0	2
		Cherry	0	1
		Darry	0	1
		Johnny	0	1
		Dally	1	1
Darrel	3	Twobit	1	0
		PaulDally	1	0
			1	0

表5　Darrel と Dallas への呼びかけ回数

here or I'll kill you! Go!

上のセリフは，文字通りには，「子どもが嫌い」だが，彼の真意は「子どもがこまっしゃくれて，知恵がつくのが嫌い」ということである。Dally は自分の気持がうまく表現できずに「子どもが嫌いだ」と言ってしまったのだが，彼等が社会の虚偽や腐敗に触れて子どもらしさを失い，根性がねじれてしまうことが嫌なのだ。彼等には，子どもらしい子ども―「知恵」がつく前の楽園の状態―に戻ってほしい（"Hey, don't get wise."）のである。その気持ちは，この子らばかりでなく，次のことばに表われるように，とりわけ Johnny に対して持っている。

Dally : Johnny, you know what a few months of jail can do to you, man? You get mean in jail. I just don't want to see that happen to you. Like it happened to me, man. You understand?

“get mean（いじわるになる，いじける）”とは—子どもの素直な目や気持ちを失ってしまうことである。Dally は「自分は監獄で性格がいじけてしまった」と言ったが，彼にも gold になる可能性はあったと感じられる。そう考える根拠は上記の 2 点を含め，以下のとおりである。

1．子どもらが，カードで賭けをしてこまっしゃくれてしまうのが嫌だと思っている。
2．Johnny のことは守ってやりたいと思っており，彼が監獄などに入って心がねじれてしまうのを見るのは嫌だと思っている。
3．新聞に記事が載り，自分に対する世間の見方が変わり，喜んでいたふしがある。
4．Johnny によると，以下のセリフのように Dally は「夕焼けを見たことがない」「世の中には，まだまだ良いことがたくさんあることに気付いていない」のである。

Johnny : I don't think he's ever seen a sunset...There're still lots of good in the world. Tell Dally. I don't think he knows.

このセリフにかぶせて，Dallas がかけていたサングラスを外す姿が映されるが，サングラスで覆い隠されていた真実の世界を見ることによって，或いはサングラスで隠していた心を開くことによって，Dallas は「夕焼け」の意味を知ることができただろう。Johnny の死で自暴自棄になり，命を落としてしまうが，その前にこのことに気付かせてやることができれば，Dally は死なずに済んだのだ。いや，Dally は子どもの心の純粋（innocence）の大切さを既に知っていたのだ。本来はこうあるべきだという姿を Johnny に託しているのだから。親が，自らはなし得なかったことを子に託すように。火事に巻かれた子らを助けて英雄として新聞に載った時，Dally はちょっぴり自分が誇らしかったはずだ。また世間の人たちに認められたことも素直に嬉しかったはずだ。Tim とてもそうだったろう。自分の仲間が英雄になった喜びを次のセリフから汲み取ることはできないだろうか。

Dally : Tim Shepherd dropped by, saw my picture in the paper, he couldn't believe it didn't have' wanted dead or alive' written underneath it.

良いことをして，少し心を開きかけた Dallas。だけれども，彼にとって一番大切な弟分の Johnny が死んだという事実を受け入れることができずに，彼はついにキレてしまう。それほど彼は純粋だったと言うことはできないだろうか。世の中に適応できない程まっすぐで傷つきやすく，それ故に虚勢を張っていた Dallas。Cherry はそんな彼の本質を見抜いて“I kind of admire him.”と言う。警察に追われて公園に逃げ込んだ時，彼の影が舗装道路の上を流れるように走る。人工的な公園の，人工の舗装道路の上を生き急いで（living in the fast lane）しまった Dally。

もうひとつ Dally と Darry の関係を考えてみる必要がある。Dally は Darry の分身（alter ego）だったのではないか。Darry が光の部分を，Dally が影の部分を担う存在と考えられる。Darry は，Pony，Soda の親代りとして大人にならざるを得なかった。たとえば

Darryは，屋根を葺くという建設的な職業で一家の大黒柱としての責任をりっぱに果たしている—これは聖母マリアの夫ヨセフの大工という職業にも通ずるものだ。彼の言動も非常に常識的である。Rumbleで相対するSocsのPaulとは，フットボール・チームの仲間だった。米国では，フットボール・チームの一員は，脚光を浴びる存在である。(原作ではDarryはチームの主将で，ハイスクールの人気投票でも一位だった。スポーツ選手のための奨学金をもらっても，お金がなくて大学へ行けなかったという設定である。) このように，Darryは，Twobitによると，面倒を見る弟たちや親しいgreaserの友人たちがいなければ，Socsの一員としてもおかしくないという。PonyやTwobitたちのことがなければ，Socsらしい立場で社会に通用する人物であることがわかる。

Twobit : You know, the only thing that keeps Darry from being a Soc is us?

それに対してDallyは，札つきの不良少年であり，Darryのいわば影の部分である。分別がありしっかり者のDarryに対して，Dally (=to act playfully, to toy) は悪さばかりする子どものような存在である。DallyはDarryの子どもの分身だと考えてもよいだろう。Dallyが死ぬとき，Twobitが叫んだように「彼は子どもに過ぎない (He's just a kid!)」のである。このセリフは原作にはないが，子どもの心の置かれた危機的状況—エスタブリッシュメントによって殺されてしまう様をより強く訴えかける効果を与えている。Darryは20歳であるが，主要人物の中ではDallyの年齢だけはシナリオに記されていない (原作では17歳とある)。DallyがDarryの分身であるためには，Dallyの年齢がわからない方が都合がよい。DallyとDarryの間には会話が交されない。私たちは，彼等には交遊関係はないのかという印象を持ち始めるところである。ところが，Dallyは，死ぬ前に電話口にDarryを呼び，助けを求める。原作では，直接電話口に出たのはDarryであるが，映画では一旦Steveを出し，Darryに代わらせることによって，DallyがDarryであることを，よりはっきり打ち出している。Dallyに身の危険が迫り，Darryに助けを求めたことは，子どもの存在が脅かされ，おとなに助けを求めたことを表わす。結局Darryの中の子どもの部分は死んでしまい，goldになる機会を奪われてしまった。こうした子どもの心をなくしてしまった大人たちの存在を匂わせ，そのことに気付かず生きているSteve，Sodapop，Tim，或いは割り切って生きているかに見えるTwobitらも，やがて大人になってしまうことを，見る者に予感させる。Bobは，そのことに気付く資質を持っていたけれども死んでしまった。Johnnyも，やはりそのことに気付いたけれども死んでしまった。

『小道具について』

前述以外に出てくる，背景の様々な小道具が物語のメッセージを伝える役割を果たしている。それらの意味するところについて見てみよう。

—butt—

公園でPonyとJohnnyがたばこの吸さしを分けあうことで，2人が追い詰められている状況を表わす。また，生命を火にたとえることから，短い煙草の吸さし (火が消えている) が誰かの生命が燃え尽きなんとしている不安感をかきたてる効果を生む。

—fire—

火事のシーンの火は以下のように様々な意味を担っている。

1．罰としての火。Bob を殺した Johnny は，この火事で負ったやけどが元で死んでしまう。

2．危険なものとしての火。子どもの魂が火にまかれ，危機に瀕している。

3．浄化するものとしての火（シュヴァリエ他1996，ド・フリース1984)。Pony らの魂が浄化された。

また危機に瀕していた子どもの魂を救った—Pony ら自身の魂も同時に救われた。子どもを救うという善行を行うことによって罪をあがない魂が浄化されたということと，存在の危機に瀕していた子どもの魂を救うということが，自身の心に子どもの魂を取り戻すことを意味している。

4．神をあらわす火。火事は神の心であった。この火事を契機に Pony らは生まれ変わる。

—夜汽車（線路）—

「人生は旅である」の基本的な隠喩が，ここに見られ，彼等が暗闇の中へ，魂を探す旅に出たことを表わす。また荒野の楽園に入り込んだ機械を表わす。

—ふくろう—

予言者として火事とその後に起こる不吉な出来事を見通している存在か，地獄の魂を救う存在か。背後に人智を越えたものの目を感じさせる。

—蜘蛛—

蜘蛛は，運命の糸を紡ぐ神的存在をあらわすが，ここでは，蜘蛛の巣にかかった獲物が Pony らのこれからの運命を予告している。そこに Johnny の寝たばこの煙がオーバーラップする。“smoke” は，「たばこ」と「煙」の二通りに使われるが，「(寝) たばこ」と「(火事の) 煙」に気をつけろという Pony の “Watch your smoke, Johnny.” という言葉は，二重の意味を持ち，これから起こる出来事を暗示する。蜘蛛の巣は，時に迷宮をあらわすが，彼等の魂が試練を経て悟りを得ること—魂の死と再生をも意味している（クーパー1978)。それは彼等にとっての楽園—子どもの無垢な心の探求なのである。

—怪物—

教会の建物をひっかくあらいぐまを，Pony は “There's a monster outside.” と言うが，これは Bob が殺された事件によって Pony の心が不安定な状態にあることをあらわす。怪物は，迷宮を守る存在である。魂が迷宮に入り込み，これを克服することは，自分の中の影を統御し，人間としての成長を遂げることである。Pony が通過儀礼の嵐の中にいる状態をあらわす。怪物はまた楽園を守る存在でもある（クーパー1978，シュヴァリエ他1982)。Pony はこの天国に一番近い場所で，魂の浄化（＝楽園状態への回帰）を経験する機会を得る。

—Gone with the Wind—

文中の Many writhed *[1] (withered) in the hot sun—が子どもたち，Pony, Johnny が火事にまかれることを表わし，There was blood, dirty bandages, groans, screamed curses of pain—これから起こること（Johnny の火傷と rumble の後の傷ついた greasers たちの姿）

の伏線となっているが，南北戦争つまりCivil War（市民戦争）で，同じ米国人が北と南に分かれて戦った，この物語を配することで，映画に通時的な観点，奥行きが加っている。それはまた，この時代に活躍した英雄たちや，楽園建設の夢がまだ生きていた当時に私たちを運んでくれる。南北戦争の後に本格的な工業化が進んで資本主義社会が発展し，アメリカは楽園喪失への道を突き進む。ここでの「風とともに去りぬ」の負傷者のシーンは，こうした「楽園への夢が崩壊する苦しみ」「傷ついた無垢」を表わすと考えられる。南北戦争後，西部開拓が本格的に推進され，資本主義社会としての体制が確立されていった。その中で貧富の差が次第に広がり，独立宣言当時の，平等と機会均等のアメリカの夢は崩壊したのだ。「風とともに去りぬ」の負傷兵たちのうめき声は，こうした当初のアメリカの夢が傷つき死にゆく様を象徴しているのである。Ponyらの「風とともに去りぬ」の本も，教会とともに火事で消失し，楽園も英雄も消えてしまったのである。Johnnyは後になって，再び「風とともに去りぬ」を求めたけれども，アメリカ・インディアンやカウボーイがアメリカ本土で見せ物として残ったように，今では，それはギフト・ショップで売られるだけになってしまった。

“Gone with the Wind”の先の一節はまた，人々が延々と愚行を繰り返してきたことをあらためて思い起こさせる。子どもたちは，手本であるべき大人の愚かな行為をまねているのであり，あいも変わらず，いがみ合うのである。同じ仲間だったDarryとPaulが敵味方に分かれて闘うことは世の不条理であり，それは争いの愚かしさを強調する。コッポラは，人が何故戦うのかを，Ponyの口を借りて問い，“Gone With the Wind”の一節を挿入することで，戦いの悲惨さを聴覚的に訴えている。映画のrumbleのシーンでは，泥だらけでSocとgreaserの見分けがつかなくなってもなお殴り合いを続ける。90分強という映画の長さと，他のカットされたシーンとを考えあわせても，このrumbleのシーンは長い。闘うことの愚かしさを見せつけるかのようである。コッポラが影響を受けたと言われる黒沢明監督の映画（おそらく「影武者」か）の戦闘シーンでも，人間の争い，殺しあいの愚かしさを，おどろおどろしい映像で，これでもかこれでもかと見せてくれるのだが，こうした争いに対する姿勢が，このrumbleのシーンに表われているのではないだろうか。何故そこまで戦うのかという気持ちを観る者に起こさせる。rumbleに勝ったgreasersの得たものは，束の間の満足感と身体のあちこちの傷だけである。それで何かが変わる訳でもなく，後に残るのは空しさのみ。それによって，Johnnyの命を救うこともできず，Dallyの暴走を止めることもできなかったのである。JohnnyやRandyの言うように，喧嘩や争いごとなど無駄なのである。

—卵—

火事の後，家に戻ったPonyは朝食に卵を食べようと調理を始めるが，どかどか入ってきたTwobitに抱き上げられて，卵を投げ飛ばしてしまう。卵は「生命，復活」を表わし，卵が割れるのは不吉なことであるという（ド・フリース1984）。原作では卵は二つで，一つは時計の上に，もう一つは床の上に落ちて割れてしまった。その日に起るJohnnyの死とDallasの死を象徴的に予告するものだ。

—裸であること—

登場人物の多く—Dally，Sodapop，Johnny，Darry—は素肌を露にする。

これは，虚飾のないありのままの姿（心）をあらわす。楽園状態への回帰—子どもの無垢な心をあらわす。Sodapop はシャワーから出て「何か洋服を着なければならない」と Steve にたしなめられてしまう。「法律か何かがあるんだ」と。そう，彼らは社会の法律や慣習に従って生きなければならないのだ。誰も赤ん坊のようにありのままの姿を人前にさらし続けることはできない。衣服は Darry の押入れにしまわれている。Soda のために「きちんとアイロンをかけて」用意しておいてくれたのだが，衣服を持っているのは，早く大人にならなければならなかった Darry なのだ。Darry は rumble の前，大人になった肉体に衣服をまとう。

赤ん坊は生まれた時は裸である。と同時に，その姿は傷つきやすくもある。Johnny は，病院のベッドに火傷で傷ついた体を横たえたまま死んでしまった。彼等の無垢な心はかくも傷つきやすい。裸である彼らは，皆，社会の慣習や法に縛られない赤ん坊で，自然児で，純粋で，そして傷つきやすい存在なのである。映画では，裸であることが楽園状態—子どもの無垢な心をあらわし，衣服が社会の法律や規範をあらわす。

—blond—

髪を脱色して金色にしたのは Pony である。彼の髪が，gold としての存在を象徴し，夕焼けに感動する子どもの目を持つことができる人となったことを示す。Bob もまた，金髪である。Bob は死んでしまったが，そうでなければ gold であり得たのではないだろうか。たとえ飲んだくれて，Johnny にけがを負わせるような者であっても，Cherry に言わせれば，良い資質があったのだ。優しく，人がついていくようなリーダーシップを持った人，gold となる可能性を持つことを彼の金髪は象徴的に表わしていると考えられる。映画の中では彼の悪い面にしかお目にかかれない，つまり彼の良さは Cherry の言葉と彼の金髪を通してしか窺えないのであるが，何者であれ，その全体像をとらえることによって，今まで見えなかったものが見えてくる。如何なる者にも gold になる可能性がある。（原作では Bob の髪は黒く，反対に Dally の髪が白—子どもの無垢を表わす色—である。Dally の髪はほとんど金に近く，故に原作では Dally が gold になる可能性を示唆していると言える。）

“Stay gold” は「子どものままであれ。子どもが曇りない目で見るごとくまわりの世界を見よ。」という意味であるが，Pony はどのように生きればよいのか。人はいつまでも無邪気な子どものままではいられず，無垢なままでは生きられない。この作品を Pony の growing up story として見るとき，Pony がどのように生きるか，以下の Cherry のセリフが意味を持ってくると思われてならない。映画館で Dally が Cherry に絡むが，ソーダ水をかけられ，怒って帰ってしまった後の Cherry と Pony のやりとりである。

Johnny : How come y'all ain't scared of us like you was Dally?
Cherry : You two are too sweet looking to scare anyone, Besides, I know about Dallas Winston. And you two don't look mean.
Pony : Yeah, right. We're young and innocent.
Cherry : No. You're just not dirty.

物語では「子ども」のような目をもつことがgoldとして捉えられていたが，現実には誰も，若く無邪気な「子ども」のままではいられない。エデンを追われた人間たちは，どのように生きればよいのか。このCherryのセリフに彼等の生き方のヒントがあるのではないか。生まれたばかりの子どもは真っ白であるが，真っ白なまま大人になることはできない。若くて無邪気なままの子どもでいられないのなら，どう生きれば良いのか。自らの弱さも，世の中の矛盾も知りつつ，それらを消すことはできないことに悩みながらも，dirtyでない生き方を選ぶことはできる。それがCherryの選びとった生き方である。Cherryは，Johnnyを見舞うようにPonyに頼まれたが，それを断わった。自分で招いたこととはいえ，ボーイフレンドのBobを殺したのはJohnnyだからである。けれども，そのこととは別にCherryはPonyたちを助けようとする。目の前の状況を，子どものような目で，先入観にとらわれずに判断し，良心に従って行動しようとしているのだ。PonyやJohnnyも，そうした生き方を悟る。そしてRandyも，rumbleの前にそのことに気づく。また，それは，生きていればBobにも，Dallyにも可能な生き方だったのではないか。

『bright sunlightとdarknessについて』

さて，ここで映画の構成について考えてみよう。映画は，始めの部分が，またもう一度最後に繰り返される円環構造をとっている。“gold”に関連する“sunlight”，“bright”の語が，“darkness”とともに，どちらも物語の最初と最後に2回，同じ形で繰り返されている。

“When I stepped out into the bright sunlight from the darkness of the movie house.”

「明と暗」を対比させるこれらの表現は，禅でいうところの「悟り（＝明)」と「迷い（＝暗)」を思わせる。映画の中では，以下のように，明と暗の背景が効果的に使われている。ピーター・カーウィ（1989）によると，コッポラのこれ以後の作品「コットン・クラブ」（1984）でも，光と影の戦いが映画全体を通じて行われており...失敗，悲しみ，あるいは喪失の瞬間には影がその場を支配する。「ペギー・スーの結婚」（1986）でも悲しみのシーンで...常に影や暗がりを用いるという。「映画館の暗闇から，明るい太陽のもとへ一歩足を踏み出した時に...」というセリフに続くのは，原作ではPonyが一人で映画を観に行った時の話しである。コッポラのThe Outsidersでは，このセリフの直後にPony，JohnnyとDallyが映画を観に行く場面に繋がっていくため，実は，明暗が一致していない。すなわち，彼らが映画館から出てくるのは夜であり，あたりは真っ暗である。けれども，そうすることによって，このセリフの意味がかえって生きてくるのである。つまり，Ponyたちが映画館から出てくる時はまだ「悟り（＝明)」の境地に到達していないのだから。

映画の構成

1．明―冒頭部分：Pony，Johnny，Dally―子どもたちの登場
2．暗―映画館でのSocsとGreasersの出会い，高まる緊張
　　Bobの死
　　Pony，Johnnyの逃亡

3．明—教会（天と地の間）Pony の啓示，悟りの旅・髪を脱色し gold にする（＝再生のしるし）
　earlier 創世紀の冷たく早い朝，朝焼け
　Pony による Robert Frost の詩の朗読（新しい朝）
　火事（＝罪の償いと魂の浄化・神の意志）
4．暗—Johnny の火傷（救急車で病院へ）
5．明—Pony と Darry の和解（相手への理解）
　Pony と Randy の理解（子どもの目で相手を見，心が通じる）
　Johnny の見舞い
6．暗—Rumble（Socs と Greasers のけんか）
　Johnny の死（子どもの死）
　Dally の死（子どもの死）
7．明—最後の部分（夕暮れか？朝か？）Johnny の手紙（＝悟り）希望と可能性

円環構造は，Johnny から Pony に引き継がれる願いと繰り返される生命，原初の状態を示唆する。原初の完全性を表す円は，人類および個人の幼児期初期のあり方を示しており，「こころ」が地上に来る前に住んでいた楽園の中にいる時期である。そして，そこから成長が始まる（ノイマン1984）のだとすると，映画のこの構造はテーマに相応しいものである。

「一生は一日である」基本的な概念的隠喩

レイコフ＆ターナー（1994）によると「人生の移りゆきが一日の移りゆきに対応し，朝は青春に，太陽の動きは人生の移ろいに対応する（p.15）」という。夜を死の訪れとしてとらえるならば，上の 2 Bob の死，6 Johnny，Dally の死，4 Johnny の火傷と病院にかつぎ込まれるシーンは，夜であるのが自然である。不幸な出来事は暗の部分に，幸いな出来事は明の部分に配置されていることがわかる。全体の構成をみると，Pony が作文を書き出す冒頭の明の部分から始まって，また同じ作文の場面に戻る円環構造である。あらゆるものの繰り返しと循環をあらわし，ひとつの生命が次の生命に継がれていくことを表わす。物語の最後のシーンで，Johnny は「風とともに去りぬ」の本を読み終える（finish）ことを Pony に託したが，実はこの時 Johnny は，“Stay gold（黄金のままでいてくれ）”という願いを成就してほしいと，Pony に託したのである。Pony に渡した「風とともに去りぬ」の本には，その願いが託されている。“you could finish it”とは，そういう意味である。finish とは“reach the end of a task or an activity, complete something or make something perfect”ということだが，この場面では「本を読み終える」ことと「黄金のままで生きてほしいという願いを成就する」ことの両方に掛けられている。或いは南北戦争のような greasers と Socs の諍いを終わらせて欲しいという願いをも，そのことばに託したのだ。Johnny は死ぬ前に「闘いは無駄だ」と伝えているのだから。

Johnny : Ponyboy, I asked the nurse to give you this book so you could finish it.

映像的には，手紙を読み終えたPonyの瞳とJohnnyの瞳がオーバーラップし，この願いがPonyに受け継がれたことを表わしている。Johnnyは，亡くなってしまったが，goldの精神は死んでしまったのではなく，Ponyの中に生き続ける。PonyはJohnnyの願いを引き継ぎ，彼が残してくれた種子を，他の多くのJohnnyやDallyの心の中に蒔くために，作文を書き始める—それらの種子があちこちで芽吹くことを願いながら。

“The Outsiders”には，三重の意味がある。一つめは「社会の成員として受け入れられていない人々」つまり“greasers”のことである。二番目は，Edenの外の人たちを指す。Edenを追われたアダムとイヴの子孫たちが，楽園回帰を願い，それが叶わぬ今，楽園の外で如何に生くべきかを探し求め，苦悩する姿を指す。三番目は，彼等の選び取った生き方をする人々を表わす。つまり，文明社会，大人社会の因習や道徳規範に従うのではなく，人間の内なる本質的な正義の声に従い行動すること—子どもの目を思い出そうと努める人々を指す。社会—虚偽や偽善に満ちた—に対する反逆者である。それは「憲法よりも高次の法」つまり道徳の法に従うべきことを唱えたヘンリー・デイヴィッド・ソローのような精神であるだろうか（亀井1997）。たとえば，映画館でCherryとMarciaがPonyとJohnnyに同席を許したのは，彼らがSocs対greasersという規範ではなく，それを超えた彼らの心の声に従ったからである。また，CherryがボーイフレンドのBobを殺されたにもかかわらずgreasersを助けたのも同じ理由からである。それは，無垢な子どもの心を取り戻すことを意味する。これが，JohnnyがPonyに託した願い—stay gold—なのであり，Cherryの選びとった生き方なのである。そこには，社会の規範にではなく，内なる良心の声に従って行動しようとする人間の姿があり，それは，苦悩するアメリカが，再び夢を取り戻しアメリカのアダムとして進むべき方向性を示唆する。資本主義社会によって貧富の差が生まれ，経済的繁栄と産業主義が大衆消費社会を生んだ。名誉や金と物質がすべての社会で，Socsたちに代表される主流の人々は物質的な富と社会的地位の獲得を果たした。彼らはついにアメリカの夢を手に入れたかにみえたのだが，彼らとて決して幸福ではなく，魂の喪失と挫折感を味わうだけであった。それは，映画館でのCherryのことば「どこでも大変なのよ」やrumbleの前のRandyの苦悩のことば「何も変わりはしないんだ」に表れている。

Cherry : ...Anyway, you think the Socs have it made. The rich kids, the Southside Soc. Well, I'll tell you something, Ponyboy and it might come as a surprise but things are rough all over.

Randy : You know, that friend of yours, the one that got burned—he might die?...And tonight...people get hurt in rumbles, maybe even killed, right? You can't win. You know that, don't you? It doesn't matter if you whip us. You will still be where you were before, at the bottom. And we'll still be the lucky ones at the top with all the breaks. It doesn't matter. Greasers will still be greasers and Socs will still be Socs. It doesn't matter...

このような社会にあっては，夢は建国当初の—子ども時代の純粋無垢な形のままでは，もはや存在することはできない。が，Cherryの生き方は，「人間としてフェアであること」は

できるということを提示してくれる。そしてそれは，Cherry の「(私たちは，若く無垢なのではない。) 卑劣・卑怯じゃないだけだ・公正なだけだ」という言葉によって表されるものである。そうした Cherry の生き方と，Johnny の手紙から，自らの選ぶべき道を汲み取った Pony は，その生き方を広めるべく書き始めるのだ。このように，清教徒たちが初めてアメリカに渡ってきた頃の，いわば無垢の子ども時代のアメリカと，成熟したアメリカとでは，おのずとその夢の形は違うのであり，アメリカのアダムとしての生き方も異なって然るべきなのである。Dallas が古い時代のアダムであるとするならば，Ponyboy は現代のアダムと言えるのではないだろうか。“Ponyboy...” という Dallas の最後の言葉によって，現代のアダムとして生きることを Pony は引き継いだのだと言える。またそれは，Johnny の助言により感知され，彼の “you could finish it (「風とともに去りぬ」を読み終えてくれ＝[アダムとしての黄金の生き方を] 全うしてくれ).” という言葉によって，引き受けたことなのである。南北戦争時代に終わったアメリカのアダムの精神を受け継ぎ，現代の産業主義社会の中で新たなアダムとして再生し生きる道を Pony は見つけたのだ。

再度アウトサイダーの三つの意味に立ち戻ると，一は，「社会」対「greasers という [見かけ上の] はみだし者」の関係。二は，「楽園」対「楽園の外」の関係で，実際上すべての者が「楽園の外」にいるわけである。この根元的な意味に Socs—Cherry 以外—は気づいていない。Randy も後には，このことに気づく。三は，「社会」対「[精神的な] はみだし者」で，greasers や Socs に関わらず，社会の虚偽や偽善に反逆する者ということである。映画の主題に即して読めば，アウトサイダーを，この三番目の意味として捉えるべきであろう。この三つめのはみだし者は，他の多くの映画や小説に描き出されるアメリカの良心の姿であり，アメリカが求め続ける理想の像である。楽園の外に投げ出された outsider 達が選び取るべき生き方なのである。そして，outsider としての Pony は，救済を他に広げようと一歩足を踏み出したのである。

ここでテーマソングについて見てみよう。

“Stay Gold”　(Carmine Coppola, Stevie Wonder)
Seize upon that moment long ago　とらえよう，遙か遠くのあの瞬間を
One breath away and there you will be　一息離れたところに君はいるだろう
so young and carefree　幼く，なにも憂いなく。
again you will see　君は再び見るだろう
that place in time　時の流れの中のあの場所を
so gold　黄金に輝く。
Steal away into that way back when　そっと戻ろう
you thought that all could last forever すべてのものが永遠に続くと信じていたあの時に
but like the weather　けれども，お天気のように
nothing can ever　なにも
and be in time　時の流れの中では

stay gold　黄金のままでいることはできない。
but can it be　だが，そんなことがあろうか
when we can see　思い出を
so vividly　こんなにも鮮やかに.
a memory　見ることができるのに。
and yes you say　そうだ，と君は言う
so must the day　だから日もまた
too, fade away　消えてゆかねばならない
and leave a ray of sun so gold　太陽の光を一筋残して，こんなにも黄金に輝いた。
Life is but a twinkling of an eye 人生はほんの瞬きの一瞬にすぎない。
yet filled with sorrow and compassion　それでも哀しみと憐れみの心に満ちている
though not imagined all things that happen　君は想像できないだろうが，この世のすべてのものは
will age too old　老いていくのだ
though gold　たとえ黄金ではあっても。
gold,　though gold.　たとえ黄金ではあっても。

このテーマソング“Stay Gold”の主題も Robert Frost の詩“Nothing Gold can Stay”と相通ずるものがある。“Nothing Gold...”は，「あらゆる黄金色のものは，そのままであり続けることはできない」と，新緑や若葉，エデン，夜明けの美しさのうつろいを嘆いた。“Stay Gold”でも，「(幼時の楽園の）思い出はこんなにも鮮やかに蘇るけれど，この世のすべてのものは，お天気がそうであるように，変わり，老いていってしまうのだ」と嘆く。そして，「時の流れを遡り，黄金色の時代一憂いなく，すべてのものが永遠に続くと信じていた幼い頃に戻ろう」と呼び掛け，楽園への回帰を願う。「人生は束の間だけれども，そのことを知りつつ，哀しみを胸に秘めながら」，それでも毅然と頭を上げて生きていこうと，さらにはっきりと歌う。その生き方は，黄金色に輝く一筋の陽光を残して消えてゆく夕日のように美しい。楽園に生きた頃の心を思い出し思い出し，人間の弱さや汚れに対する憐れみの心を持ちながら，束の間の人生にすてばちになることなく，束の間だからこそ，慈しみの心を持って，胸を張って正しい道を選び取る。それが黄金である。“Stay Gold”では，短い人生と短いが故に誇り高く生きよう，という生き方にまで踏み込んで歌いあげ，楽園回帰の願いをさらに強く打ち出していると言える。アメリカ大陸を初めて見たピューリタンの水夫たちの驚き（wonder）を，もう一度取り戻そう。荒野は消えてしまったが，今こそ，もう一度子どもの心に返って，まわりの世界を驚きの目で見る必要がある。フロンティアや「西部」は地理的な地域だが，それ以上に人間の心の中の心理的な地域である（大橋1969）とするならば，実際のフロンティアが消え，西部の楽園がなくなり，ヒーローもいなくなってしまった今，人々の採るべき道は，「明白な宿命（マニフェスト・デスティニー)」として殺しあいをしながら，領土を他に広げることでもなく，偶像のヒーローを求めることでもなく，ひとりひとりの心の中に，建国当初のアメリカのアダムの，あの無垢な心を取り戻すことなのではないか。思い出はあたかも現実のように鮮やかな姿をみせるけれども，本当は楽園が

消え，ヒーローが死んでしまったことを認めなければならないのだ。そして，あらゆる黄金のものは—水夫たちの驚きの目も，子どもの無垢な心も—色褪せてゆくものであることも知らなければならない。だからこそ，その心を忘れてはならない。だからこそ，心の中にアメリカのアダムを蘇らせる必要があるのだ。誰もが求めるヒーローは，現実には，もはや存在しないけれども，一人一人の心の中にヒーローを蘇らせることはできる。腕っぷしの強い（tough）ヒーローではなく，驚きの感覚を持った公正な（not dirty）ヒーローを。

註１：シナリオ，原作では writhed となっているのを，本番で withered と言い換えている
註　：本文中のセリフは，筆者がテープからおこしたものを使用している。

参考文献

シュヴァリエ・J，ゲールブラン・A　(1996)『世界シンボル大事典』　大修館
クーパー・J.C.（1992）『世界シンボル辞典』　三省堂
カーウィ・P（1991）『フランシス・コッポラ』　ダゲレオ出版
ド・フリース（1984）『イメージ・シンボル事典』　大修館書店
Hall, James (1994) Illustrated Dictionary of Symbols in Eastern and Western Art, John Murray Ltd., か London.
Hinton, S.E. (1967) The Outsiders Dell Publishing Co., Inc. New York.
亀井俊介（1993）『アメリカン・ヒーローの系譜』　研究社
亀井俊介（1997）『アメリカ文学史』　南雲堂
河合隼雄（1967）『ユング心理学入門』　培風館
Lakoff, G. & Turner, M・(1989) More Than Cool Reason, The University of Chicago.
［レイコフ・G. ターナー・M.（1994）『詩と認知』　紀伊國屋書店］
マークス・レオ（1972）『楽園と機械文明』　研究社
ノイマン・エーリッヒ（1984）『意識の起源史』　紀伊國屋書店
大橋健三郎編（1969）「フロンティアとアメリカ精神」『フロンティアの意味』講座アメリカの文化 2　南雲堂
山本晶（1989）（浜野成生編『アメリカ文学と時代変貌』研究社）